

猿知恵の魂胆、その結果は斯くの如し（谷川岳・保登野沢 顛末記）

寓多羅亭鈍助

情けないことに、八十路坂に差し掛かった頃から急速に老齢化が進み心技体とも全く役立たずとなった。特に体力の老朽化はその最たるもので、歩行スピードと歩行持続時間が激減した結果、普通の登山コースでも標準コースタイムの2倍以上の時間が掛るようになってきた。このことは即ち、標準コースタイムで言えば往復で3時間程度の超短距離ルートしか登れないということである。

かかる状態では、近郊のウラヤマや里山の幼稚園児遠足向けのお散歩コースを辿るのが関の山という情けない塩梅となって、かつてはヒマラヤ、アンデス、欧州アルプス、北米ロッキー山脈で鳴らした（としたい）ワタクシ奴としては実に立つ瀬がない。

齢を取っても尚矍鑠として体力維持増強トレーニングに励み、また老境にこそ相応しい山行の在り方も研究して“老いて益々ご活躍”の先輩諸氏も居られるが、ワタクシ奴は自慢ではないが体力維持増進トレーニングなどは全くやったことがなく、また、老境の中でこそ相応しい登山の考え方や山歩きの方法などについても研究したことも考えてみたことも無いという怠け老人である。

このような怠け癖に恰好の弁解を与えてくれたのが1年半前に体調を崩して発病した業病（間質性肺炎）であった。この病気は国の難病に指定されているので、この病に罹ったことに拠る体力・気力の激減は大手を振って堂々と弁解できるというシロモノであり、小生にとっては“山が遠のいて行く”言い訳をするための格好の特効薬でもある。

（余談であるが、この病気は、肺が吸い込んだ空気から酸素を取り込む役目を担っている間質細胞と呼ばれる肺細胞がコンクリート化した為に、急激な運動をすると直ぐに息切れが起こり、例えば日本の山でもハードな登山は勿論のこと、普通の縦走登山なども出来なくなったことは事実であるが・・・）。

さて、そこで無いアタマを捻って考え出した“猿智慧”が下記のようなシロモノだった。これは老境にあっても未だ未だ若かりし頃の“栄光”が捨てきれない瘋癲老人にはちょっとした特効薬のネタだと思うので、恥を忍んで紹介する次第であるが、お読み頂ければお分かりになるように、やはり凡夫の猿知恵の域を出ないどころか、“無謀な瘋癲老人、無謀登山で滑落遭難死”という結末になること必定であるから、下記のような小生の事例は決して真似をされないようお願いしたい。

さて、上に述べたような体力では重力に逆らって登って行くのはすっかり厳しくなったので、同じ登山ルートを辿るにしても頂上までは“他人の足”で登って、自分の足は重力が仕事をしてくれる下山ルートだけで使うという安直な方法は無いのかと廻らないアタマを捻ってみた。

古くは大財閥の当主大倉喜八郎が自社所有地の南アルプス検分と称して自分や数多の大奥の女人を籠に乗せて担がせ、風呂桶や酒樽なども担がせて200人のポーターを従えて赤石岳に登ったという大名登山の伝説もあり、また新しくは三浦雄一郎がアンデス・アコンカグア峰の頂上近くまでヘリで運んで貰ってスキーで滑降するという計画（結果は高山病のためにヘリでも登れず）も記憶に新しいところである。

しかしながら当然の事ながら、貧者の小生には爪の垢を穿っても左様な資力は毛頭なく、尊敬する某先輩が言われる「筋力の劣化は乏しい金力で補って、装備の軽量化に努める」ことが出来る程の財布の余裕も無いところが哀しいところである。そこで一計を思いついたのが、頂上に近い場所までロープウェイか何かに通じている山なら、登りは若干のロープウェイ料金で座って登ることができ、そこから下るだけなら重力が仕事をしてくれるので大した体力も要らないのではないかという案であった。

このような山は探せば結構各地にあるのではないかと思うが、まずは手近な所では谷川岳ロープウェイを使う手はないかと考えた次第である。

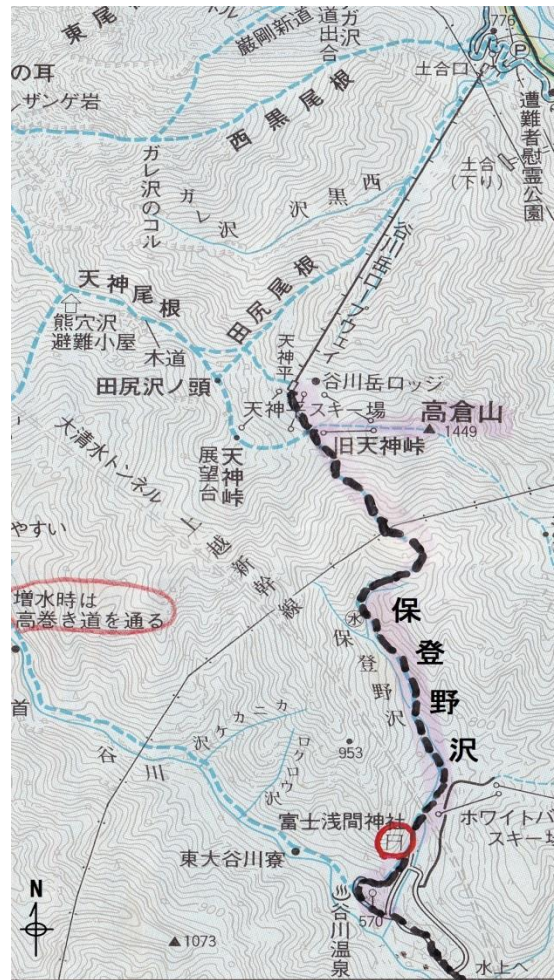
情けないことに、もう谷川岳本峰頂上まで登る体力も気力も無いが、ロープウェイ終点の天神平から

下れるルートでしかもちょっと通向きと自慢できるルートはないものかと物色したところ、昔の修験者が谷川岳登拝に使った修験道であった旧天神峠(1,350m)から保登野沢経由で谷川温泉に下るルートが目についた。下山の標準コースタイムは2時間というから、我が劣化した脚力のゆっくり歩行ペースでも3~4時間もあれば御の字であろうと踏んだ。

天神平から旧天神峠へは、天神平スキー場がオープンするとスキーヤー以外は通行禁止になるので、2022冬のスキー場オープン予定日12月1日ギリギリ直前の2022年11月27日に急遽思い立って試してしてみることにした。

天神平までロープウェイで上がってみると、天気掲示板には強風と降雪のマークが出されていたが、スキー場には積雪は全く無く、僅かに天神峠付近に先日の残雪の名残が薄く残っている程度であった。上空には黒雲が早いスピードで流れていたが、所どころに青空も見えていたのでルンルン気分ですまずは旧天神峠目指して登って行った。

旧天神峠の古びた道標は倒壊していて「保登野沢方面へ」の標板も朽ちて地面に転がっていた。道は高倉山の南斜面を下るように付けられていて、初めの内は保登野沢の深い溪谷や麓にあるホワイトバレースキー場、谷川温泉などの俯瞰がのんびりと楽しめるノンビリ道であったが、下るに連れて段々と怪しいコース状況に変化していった。旧天神峠の倒壊した道標の有様が何かを暗示しているようであった。



(旧天神峠。保登野沢は奥右下へ。左奥の山は高倉山)



(旧天神峠付近から谷川温泉方面をルンルン気分で見下ろす)

怪しいルート箇所に出くわした初っ端は、小さな涸れ沢を横切っている登山道が土砂崩れで崩壊している場所で、壁に叩きつけられた蛙よろしくズルズル滑る急な山腹斜面を手足を八の字に延ばして高巻トラバースをしなければならなくなった箇所が出て来た。ホールドになるような樹木や岩角は何も無く、僅かに生えていた雑草の茎束も握っただけで剥がれて抜けてしまうという塩梅で、土砂壁に両手の指先と両足の靴先を僅かに突っ込んだ不安定なホールドだけを頼りに5回程のトラバースを強いられたが、足下はゴロタ石の落石の堆積で埋まった垂壁の井戸の底となっていて、もし足を滑らせればそのまま阿弥陀如来サマのご来迎という雰囲気のある場所だったので、久しぶりに昔やったロッククライミングでの墜落の恐怖が蘇り、心臓がパクパクしてきた。

ルートはこれ以外にも、ゴロタ石の急なトレンチの上に枯れ落ち葉が積み重なっていて、落ち葉の下に隠れたゴロタ石もよく滑った。滑って転ぶと運が悪ければ谷底まで滑落しそうな塩梅であった。

また、斜面に付けられた細い径の路肩が崩れていて、足が置けるような平場が消失してしまっている箇所もかなり沢山あった。ここもズルズル滑る落ち葉の急斜面で、滑れば谷底という場所だった。

怪しいルート箇所の圧巻は、径が保登野沢を徒渉している箇所が3箇所あって、橋などは勿論のこと踏み置き石などの人工的設置物は何も無く、飛び石伝いにも渡れないので靴を脱いで裸足になって徒渉したが雪解け水は足を切る程冷たかった。徒渉点を示す道標や踏み跡なども無かったので、このルートを登ったことがあるベテラン経験者同行でないとかかなり厄介なことになると思われた。

以上のようなコースであったから、旧天神峠から谷川温泉に下り終えるまでに標準コースタイムの3倍近い5時間半を要し、谷川温泉から水上駅まで日が暮れた真っ暗闇の中の山道を歩かなければならない羽目に陥った。この小生の所要時間と標準コース時間との差は、小生の遅足の所為もあるが、かなりの部分は上で記したようなルート上の問題箇所の通過に手間取った結果であった。

問題箇所を通過するのに手間取れば、山中で草臥れ果てたり、タイムアウトで真っ暗闇になったりして道を失ったりする危険性が少なくなく、真夏なら兎も角、冬に入ったこの時期には遭難の代償も大きなものになるであろう。

以上の小生の恥ずかしき事例は、横着をして楽なコースで逃げ切るという魂胆だったのであるが、やはり谷川岳大明神さま（正確には富士浅間大明神）はこのような魂胆を見逃してくれる筈はなく、今回の問題も遭難事故に至らなかっただけでもマシというモノであろう。小生も谷川温泉に辿りついた時にはヘトヘトに草臥れ切っていた。悪場や徒渉で神経を使い果たしたことも身体的疲労以上に精神的にも疲労した結果と思われる。

計画では下山口の谷川温泉で一風呂浴びて紅灯の巷で風呂上がりのビールで喉を潤すという魂胆であったが、残念ながら谷川温泉も紅灯も閉まっていたが、それ以上に本人の身体と気力に左様な余裕が無かった。谷川温泉から水上駅までの歩行はもうフラフラの態であった。

やはり猿智慧は猿智慧にしか過ぎなかった。会員諸氏も小生の猿智慧の愚を重ねないように、恥かしながら失敗作を紹介した次第である。

[保登野沢コースへの追記]

コースの途中には近年設置されたと思われる色褪せた赤テープがあったが、径は暫くの間歩かれた形跡が全く無かった。また、廃道か獣道に変化しているような箇所が沢山見られた。このような個所では滑落の事故が起きても不思議ではなく遭難事故の結果もシビアなものになると思われる。

従って崩れた登山道を修復するか、或いは廃道にして立ち入りを禁止しないと早晚重大な遭難事故発生の危険性が高いと思われる。ルート自体は登山道さえしっかりしていれば樹林帯とハイマツ帯が楽しみ、上部では眺望も良いルートであるので、何とか修復して貰いたいものである。

(山行日：2022年11月27日、単独行)

(了)